Song　for　friend ～旅立つ君へ～

帆立レノン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｏｎｇ ｆｏｒ ｆｒｉｅｎｄ ～旅立つ君へ～

【Ｎコード】
Ｎ８５８８Ｐ

【作者名】
帆立レノン

【あらすじ】
１２月３１日。大晦日。自宅の２階窓から見る景色。今年最後の景色。来年見る事は無い。
県外に就職した決まった主人公。大晦日の日彼の幼なじみで後輩の笠原歌波（かさはらかなみ）に楯嶼神社に呼び出されて――――

１２月３１日。大晦日。自宅の２階窓から見る景色。今年最後の景色。来年見る事は無い。
高校最後の年。俺は就職が決まった。
地元から離れて一人暮らし。うるさい親も居ない、金も自由に出来る。男子高生なら誰もが憧れる。
同時に不安で、やっていけるのかと思う。
期待と不安の二律背反（ジレンマ）。格好つけて言うとそんな感じだ。
「ん……？」
ふと、携帯を見るとメールが来ていた。
ｆｒｏｍ笠原歌波（かさはらかなみ）
「……何だよ。一体」
笠原歌波。一個下の後輩。と言っても小学生からの付き合いだ。付き合いと言っても恋人と言う訳じゃない。腐れ縁だ。

『起きてます？　今から楯嶼神社に集合っスよ（＾Ｏ＾）』

「はぁ！？」
その内容を見て俺が驚愕する。楯嶼神社と言えば楯嶼山の山中に有る神社だ。

『いきなり何言ってんだ！　馬鹿かお前！　俺は行かないぞ！』

返信。
「ったく……何なんだよ」
後４時間で年明けだと言うのに。第一初詣何て行く予定は無かった。

ぴりりと。味気ない着信音が響く。

ｆｒｏｍ笠原歌波。

『もう来てるっスよ！　楯嶼神社。着物っスよ。着物（＾Ｏ＾）／』

「はぁ！？」

再び同じリアクションを取る俺。

「何考えてんだ……あの女」

頭を抱えて思わず一人言を呟く。

『俺は行かないからな！』

返信。

「……」

アイツの事だ。本当に来ているだろう。だからどうした。そんな馬鹿の為にわざわざ出掛ける必要が何処にある。そもそもいきなりだ。予定も約束も無い。

ぴりりと。再び俺の携帯が鳴る。

ｆｒｏｍ笠原歌波

『そっかー。何か予定があるんスね……無理言ってスイマセンっスｍ（＿＿）ｍ』

「っ！？」

本当に馬鹿だ。予定なんかありゃしないのに。

「チっ！」

俺は着替えを手に取った。

「あら……こんな時間に何処に行くの？」
玄関から出る途中、母さんに捕まった。
「……初詣だよ」
「アンタが？　珍しいわね～」
「うるさいな。俺の勝手だろ」
不躾に母さんを追い払う。
気を付けてねと言う母さんの声を背後に俺は家を出た。
外は雪が降っていた。２４日（イブ）には降らなかった癖に、今更降るなよ。滑るし寒いし。
とにかく走る。大晦日に何やってるんだ。俺は。

楯嶼神社。予想外に参拝客が多い。
何処だよ……アイツ！
「あっ！　センパイっス！　こっちスよ～！」
捜す……必要が無かった。大声で叫びながらこちらに全力で手を振る馬鹿一人。俺は踵をかえした。
「あ、アレ？　センパイ何処に行くんスか！？」
「……」
「センパイ～！　気付いて無いんスかぁ？」
「気付いて敢えて無視してんだろうが！！　この馬鹿！」
「わっ！　センパイ何怒ってるんスか！？」
「そりゃ怒るだろ！　大体急に呼び出しやがって」
「あれ？　用事はよかったんスか？」
「……はぁ」
「む……なんスか？　そのどうしょうも無いなコイツみたいな目は？」

「実際どうしようも無いだろうが！」
「ヒドイっスよ～センパイ！」
「それとその欝陶しい後輩口調止めろっていつも言ってるだろ！
「あっ。そんな事よりも、どうスか？」
人の話しを聞けよと言いたかったが多分無駄だろと判断して止めた。
「……何がだよ」
「着物！　着物っスよっ。似合います？」
そう言ってくるりと一回転する歌波。
……今までの言動や行動を見ていたら信じられないだろうけど歌波はかなりの美人だ。
あどけなさの残る顔立ち。くりくりとした大きな瞳に艶やかな唇。腰まで伸ばされた美しい髪は大人の魅力さえ感じる。大人の魅力と子供の純粋さを兼ね備えたような外見だ
「どうスか？　どうなんスか？」
中身が残念である。
「どうって言われてもな……」
改めて歌波の全体を見てみる。桜柄のピンクをベースとした一見すると子供の着そうな着物だが、身体のラインがしっかりと分かる。腰のくびれとか、胸の膨らみとか……異様に色っぽい。健全な男子だったら揉んでみたいと誰もが……って、何言ってるんだ俺。
「……ああ。可愛いな」
「でしょ！？　可愛いっスよね！」
可愛いと言うより綺麗と言いたかったが恥ずかしいので止めた。
「それでなんたっていきなり――」
「あああ～！？」
話しの途中大声をあげる歌波。視線が集まる。
「な、何だよ。急にデカイ声出して……」
「あ、あと一時間で新年っス！　ヤバイっス！」
「はぁ！？　何が？」

確かに腕時計は２３時を差していた。
「こっち来るっス！！」
「お、おい引っ張るなよ……」
歌波に腕を引かれ、俺も小走りになる。
「おい！　何処行くんだよ？」
「いいから！　こっちっス！」
一体……何だと言うんだろう？　引かれるまま俺も走る。
「こっちっス！」
「っておい！　そっちは……」
整備されている山道を外れ、獣道に入っていく歌波と俺。
竹林を抜けていく。
いつの間に、用意したのか懐中電灯を手にずんずんと進んでいく。
「おい！　危ないって！　崖とかあったらどうすんだ！」
「大丈夫～っス。私に任せるっス！」
「……人の話聞かないなアンタ」
でも歌波と二人きりだった。繋がれた手。お互いの体温が感じられた。
「……着いたぁ～～～～ス」
「……」
開けた場所に出た。そこは……
「あ……」
街が見渡せる場所だった。夜は明けかけていて、綺麗だった。
「はぁ～間に合ったっス」
ほっとしたような声でそんな事を歌波は言った。
「そうか……ここ……」
そうだ……思い出した。昔、小学生の頃来た事がある。俺達だけの秘密の場所。街が見渡せ、しかも初日の出も見れる俺達だけの……
「思い出したっスか？」
「ああ……あの時は敦も京も居たっけ」
「でも見つけたのはセンパイっスよ」

「俺……？」
「そうっスよ！　探検開始とか言って私達を引っ張っていったじゃないスか！」
「……そうなのか」
「そぉっス！　……夜明けまで時間あるっスね」
「……ん。そうだな」
あと２０分以上あった。歌波は少し震えているように見えた。
「寒くないか？」
着込んでいても肌寒い。着物では寒そうだった。
「平気っスよ～」
「……」
俺は上に着ていたダウンジャケットを歌波に被せる。
「あ……でもセンパイが」
「いいって。お前に風邪引かれたら困る。それに」
「……それに何スか？」
「たまには俺に格好つけさせろよ」
「……」
一瞬キョトンとした表情を作る歌波。あれ？　外したか。
「……ぷっ」
「笑うな！　ったく言って損したぜ」
「だってセンパイのキャラじゃないっスよ～」
「悪かったな」
「でも……格好よかったスよ」
「茶化すな」
「キュンと来ましたっス！」
「嬉しくない」
「でも……懐かしいっスよね」
「……話を聞けよ」
「
「忘れた事は無かったっス。こんなに綺麗な景色……忘れる訳無い

っスよ」
「……」
中学に入って、いつの間にか高校生になって勉強とか部活とか進路とか余裕が無かった。ここに来る暇おろか、来ようと言う気すら無かった。そしていつの間にか忘れてた。
「こんな綺麗……だっけ？」
改めて景色を見る。変わらない。変わったのは俺か……
「～～～～♪」
隣から響くメロディ。よく耳にする曲。題名は分からない。そもそもこの曲に歌詞はあったか……
「～～～～♪」
美しい歌声。少し悲しげに聞こえる。
「～～～～♪　～～～♪」
俺は何も言わずに歌に聞き惚れていた。
「～～～～♪」
歌が止まった。
「ここの景色は変わんないっス。センパイが遠くに行っても変わんないっス」
いつもと変わらない口調と裏腹に淋しげな表情を浮かべていた。
「歌波……」
「知ってるっスよ。行っちゃうんスよね？」
「……ああ」
少し躊躇い……俺は肯定した。
「だから、最後に……見せたかったんだよ」
久々に聞く幼なじみとしての声は悲しげな音色だった。胸が締め付けられる。
夜が明け初めていた。
「もう一度見て欲しかったんだ……そして、二人きりで話したかった」
夜が明けた。

日の光がとても美しく輝いていた。目を細める程の光。
「センパイ……」
その光を背景に。その歌波はとても綺麗に見えた。眩しくて直視何て出来なかった。

「貴方のコトがずっと好きでした」

3月14日。卒業式。月日が経つの早いモノだ。
「泣く事無いだろ？　敦」
「だ、だってさぁ～。地元離れるんだろ？　二度会えないかも知れねーじゃん」
「永遠に会えない訳じゃねぇだろ……それに時間があれば戻ってくるって」
「でも……何も今日から行く必要無いだろぉ」
「区切りいいし。決めた事だ」
「歌波ちゃんは？」
「……歌波とは…もう」
あの元旦の出来事を思い出す。

「ごめん……俺付き合えない。今更自分の道を変えるのは無理なんだ……」
やっとの思いでそれだけを告げた。歌波は悲しそうとは違う複雑そうな表情だった。
「あ～あ。フラれちゃったんスね。私」
「ごめん……」
「もう謝らないで。分かってから。分かってたよ」
「歌波……」
「うん。意地悪だった」
「……」
「意地悪……だった」
そう言って彼女は微笑んだ。涙の混じった、泣き笑いの表情だった。

「……」
「どうした？」
「いや……」
何でも無いと、俺は呟いた。
「じゃあな。敦」
「ああ……また会おうぜ！　絶対だぜ！！」
「ああ！」
俺と敦はお互いの拳をぶつけた。
慣れた筈の帰り道。最後と思うと……少し違う。風景も心の持ち

ようで変わるのだろう。
「母さん……見送りはいいって……」
「……身体に気をつけてね。風邪とか引かないでね。それと……」
「……色々ありがとうな。母さん」
自分な口からそんな素直な言葉が出るとは思わなかった。
「本当に気をつけてね」
「ああ。母さんも元気で……」
我が儘言えるのも、甘えられたのも……今日で終わりだ。
「じゃあ……行くよ」
「……いってらっしゃい」
「……行ってきます！」
いつかただいまが言える日まで。

楯嶼駅のホーム。時間も外れているのか人は居ない。
静かなホームで俺はベンチに座る。
俺はこの景色を忘れない。二階の部屋から覗く景色を忘れない。
あの時見た景色を忘れない。歌波の顔も、声も、仕草も全部忘れない。絶対。
「～～～♪」
「！」
聞き覚えのあるメロディ。そして歌声。この歌は……
「Ｓｏｎｇｆｏｒｆｒｉｅｎｄ♪」
そのフレーズでその歌は締め括られた。歌い終えた彼女――笠原歌波が、そこに立っていた。
「歌波……？」
「何で疑問系なんスか？　センパイ？」
「い、いや……だって」
「後輩として、センパイの見送りをするのは当然じゃないっスか！」
元気よくそんな事を言う歌波。
「もちろん幼なじみとしても……ねっ」

いつも通りに、本当にいつも通りの歌波だった。
「はぁ……」
「む……なんスか？　そのどうしょうも無いなコイツみたいな目は？」
「実際どうしようも無いだろ？」
「ふふっ」
「ははっ」
自然に笑い合った。お互いに笑い合った。子供のように笑い合った。
電車の警笛が鳴り響く。
「そろそろ電車来るっスね」
「ああ」
「今度会う時は無茶苦茶美人になって私をフッた事後悔させるっスよ」
「ああ」
「さよならは言わないっス！」
「ああ」
「また、今度」
「ああ。また、な」
こうして俺達は別れた。
でもまた始まる。新しい人生が俺にも歌波にも待っている。。別れとかそうゆう感情はお構い無しに進んでいくのが人生と言うモノだ。使い古された表現をすれば別れがあれば出会いがある。
でも忘れていなければきっと。また会える。
「Ｓｏｎｇｆｏｒｆｒｉｅｎｄ♪」
友達に送る歌。
忘れない。きっと

（後書き）

故郷を離れる事は、別れでもあり新たな第一歩だと思います。何処まで離れようとも、故郷を忘れる事はきっと無いと思います。

例えば、見馴れた公園。

例えば、見馴れた景色。

例えば、見馴れた家。

思い出してみて下さい。

そして、これから故郷を出る人も一度振り返ってみてはどうでしょう？　思い出や記憶が蘇る筈です。その想いを胸に抱けばきっと大丈夫です。

〜Ｎｏｖｅｌｆｏｒｆｒｉｅｎｄｓ〜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8588p/

Song　for　friend ～旅立つ君へ～

2011年1月1日04時40分発行